
魔法少女リリカルなのは～最速のコックローチ～

初心good

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜最速のコックローチ〜

【Nコード】

N1855W

【作者名】

初心good

【あらすじ】

一言で言い表そう！これは”ゴキブリの恩返し”です。

プロローグ（前書き）

懲りずにまた二次創作を書いてみた！
これとは別にオリジナルも制作中！（宣伝）

プロローグ

「ぎゃあああああああああー！ー！ー！！」

ブチッ

「母上ー！ー！ー！！……畜生！なんで……」
なんで私達がこんな目にあわなければいけないのだ！」

私達は今、命を狙われている……いや、もう私”
だけ”だが。

なぜ命を狙われてるかは分からない。ただ、我が一族は人間から無
意味にも殺される運命にあるようだ。

ある時は罨。ある時は毒ガス。ある時は潰されて殺される。

私たちの住処が見つかり、いち早く逃げ出すことができたのは私と
母上のみ。

父上と弟達は逃げ遅れ、毒ガスによって殺された。

そして一緒に逃げ出した母上も今さっき叩き殺された。もう、私しか残っていない………

人間なんぞにころされてたまるものかつ！絶対に私だけは逃げ延びてやる………絶対にだ！

私はそう誓い、人間から逃げけるために必死に走り続けた。

――――
――――

「ハア………ハア………ここまでくれば大丈夫だろ………」

私は必死の思いであの場から逃げ出した。

生き残ったのはやはり私だけのようで、後ろを振り返っても誰も追

いついてはこない……………

「……………とりあえず新しい寢床を見つけなければ」

私たちとて、生きるためには食料や水は必要だ。

なのでまたどこかの人間の家に住み着く必要がある。

何処に入り込もうか、そう考え始めた矢先の事だった。

「お、餌発見！」

「くっ！アシダカ軍曹か！」

私はほぼ反射的に声がした方向の逆方向に走り出す。

運が悪い事に、私たちを主食にするアシダカ軍曹と遭遇してしまった。

軍曹との距離は50センチメートルほどだが……………

軍曹は私より足が速い、これだけ距離があっても逃げ切れる可能性は低いのだ。

スタミナが万全な時の私ならまだ勝機はあったかもしれない。だが、今の私は人間から逃げるために全力で走ってきたばかりなのだ。

これほどまでに万事が尽きるとは………私
も運が無いな。

だが、何もせず捕まるのは私の性に合わない。

運が良ければ逃げ切れることもあるだろう………
………

私はどうか逃げ切れるようにと神に願い、また逃走を始めた。

プロローグ（後書き）

この時点で主人公は海鳴市にいます！
目指せ！脱テンプレ！

最速の1話 全ての始まり（前書き）

まず1話投稿

今回はA・S編にそって二次創作を組み立てていきます！
これにより話が詰まるのを事前に予防できるはず。

最速の1話 全ての始まり

「が・・・・・・・・・・・・・・・・・・は・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

あの後、私はアシダカ蜘蛛から死ぬ物狂いで逃げた。

触覚が片方とれようが、足が何本千切れようが、関係ない。

他種族から忌み嫌われ、ただ殺される。意味もなく殺されるという運命から脱出したかった。

いや・・・・・・・・・・そんな事よりも力なき者が力のある者の一方的な都合でねじ伏せられるこの世界を認めたくなかったから。否定したかったから。

どうせ死ぬのなら・・・・・・・・・・私の尽くせるすべてを尽くし、満足の中で死んでいきたい。そう思ったから・・・・・・・・・・

そして、奇跡的に逃げる事ができた。

なんども捕まりそうになった。だがアシダカ蜘蛛にアクシデントが起き、目を離れたすきに私は偶然近くにあった家に逃げ込み、九死

に一生を得ることができた。

私はもうじき死ぬだろう。だが、このまま寿命で死ぬるのなら私は満足だ。

このまま、死ねたのなら．．．．．

「きゃっ！ゴキブリや！！」

！？．．．．．ふふ．．．．．ふはははははははははは！！

とうとう神まで私たち種族を見捨てたか！

逃げ出したいが、もう私には逃げ切るだけの体力と足が残っていない。

万事休す。こうなったら私の運命を受け入れようじゃないか。

早く殺せ人間！所詮私はゴキブリ。お前たちにとっては害虫でしかないのだから！

私はもうすべてをあきらめた。

人間は私たちを見つけると必ず殺す。

この人間もまた、ためらいもなく私を殺すだろう。

ああ、やっと．．．．． やつと精根尽き果て、殺されずに死ねると思えたのだが。

．．．．．
ぬ？

何故だ、何故この人間は私を殺さないのだ？

この人間に発見されてから約1分半、これだけの時間があれば踏みつぶすなり毒ガスを浴びせたりなんでもできただろう。

大抵の人間は私の事をまるで汚物を見るような目で見るが、この人間はボロボロの私をまるで憐れむような目で見ている。

ん？何か私に語りかけてきているようだ．．．．．だが私には人間の言葉は理解できない。

私はこの人間に少し興味がわいた。

私たち種族をゴミのように扱わず、今にも死にそうな私にたいして
憐れんでくれるこの者に。

私はこの者を見ていて、あることに気付いた。

おそらく、この者は足を悪くしている。

このことに気付いたとたん、なぜこの者が私を殺さないのかが分か
った気がした。

「ああ、この者も弱者なんだな」と

この者は弱い故、強き者が知らない”やさしさ”を知っているの
だろう。

ああ、神はまだ私たちを見捨てていなかったようだ．．．．．
．．．．．これでやっと逝ける。

最後に、やさしき者よ．．．．．ありがとう

もし、来世と言うものがあるのであれば、必ずこの恩を返そう。必ず．．．．．絶対．．．．．

私はそう誓い、まもなく息を引き取った。

最速の1話 全ての始まり（後書き）

主人公は海鳴市でお亡くなりになっ……..
でもただ死んだだけじゃ話にならないからね！ちゃんと話は考えて
ますよ！ついでにオリジナルも絶賛製作中！（宣伝…完成率10パ
ーセント）

目指せ！脱テンプレ！！

最速の2話 望が闘争（前書き）

3話目も書いてから投稿しようと思ったんですけど、それがちよつと時間かかりそうなのでとりあえず投稿。

執筆は難しいぜっ！

最速の2話 望が闘争

”目覚めよ、憐れなゴキブリよ”

む、誰だ？

私はやっと死ねたのだ。放って置いてくれ。

”貴様が望むのであれば、どんな願いでもかなえてやろう”

なに、どんな願いでも叶うだと？

”喰い付いたか、という事は何か願いがあるのだな？ならば願え！
そして手に入れろ！！”

話が見えん。だが、願いがかなうというのならあの少女に恩を返せるのでは？

あの少女に受けた恩が返せるのであれば返したい・・・・・・・・・・
・・・・・ならば、

「分かった。願おう・・・・・・・・・・私は死ぬ前に見た少女に恩を返したい。

弱者である彼女を幸せにしてやりたい!!」

”その願い・・・・・・・・・・聞き届けたり。その願い、本心であるな
?”

「ああ、本心だ。私はそれ以上もそれ以下も望まない。
私が望は彼女の幸せ!それだけだ」

”ならば、その願いを自分の力でつかみ取るのだ。戦え!このゲームに参加する者は全部で10匹、願いを叶えられるのは最後に生き残った1匹のみだ!!協力、停戦、裏切り結構!どんな手を使ってでも生き残って見せよ!!”

ふん、ただで願いを叶える気はないという事か。

「いいだろう！このコックローチ、少女に受けた恩を返すために．．．．．願いをつかみ取って見せようじゃないか！」

私はそう声の主に告げる。

”では、Insect Duel．．．．．ス
ターゲットだ！”

最速の2話 望が闘争（後書き）

短めですが、まあプロローグ的な何かと思ってください。

次回、ゴキブリが海鳴市に再度降臨！

括目せよ！ゴキブリのスピード！！

ついでに新コーナー！

ゴキブリ図鑑〜世界のゴキブリ達〜

…チャバネゴキブリ…

日本でよく見られるゴキブリの一つ。

本種は成虫になっても体長が12？内外と小型で成長が早い。原産国は東南アジアとも言われ屋外では越冬しないが、環境さえ良ければ驚異的な繁殖力を持つ。日本国内に生息しているゴキブリのなかでは、最も個体数が多いゴキブリと考えられる。

主要な生息場所は、冷暖房が完備されたビル内で、特に飲食店厨房内には多い所では何万匹という数のゴキブリが生息しており、家住性昆虫の中でも？1である。ちなみに学校とかで見かける奴は大抵コイツ。

又、他の大型ゴキブリに比べ成虫までの成長期間が短く、さらに殺虫剤に対して抵抗性を持つ個体まで出現してきているので、駆除するには非常に難しいゴキブリである。

だが、チャバネゴキブリは日本の冬は越せず、-5℃に24時間さらすと死亡すると言われており、家の中のゴキブリを壊滅させようと思えば、1ヶ月間冬の状態にしておけば、卵も含めて全滅させられると考えられている。

ゴキブリ図鑑〜世界のゴキブリ達〜チャバネゴキブリ編 完

目指せ！脱テンプレ！！

最速の3話 蘇りし最速の魂（前書き）

4話も時間かかりそうなので投下。

はい、Gの姿はGのままです！

Gが人間に転生することを想像してた方、本当に申し訳ないです。

でも！戦闘シーンはすごくかっこよく書きたいです！！

ちゃんとその時には人型になってるよ手になるのでよろしく！

最速の3話 蘇りし最速の魂

”では……ゲームスタートだ！”

声の主の掛け声とともに、私は氣を失った。

[illegible]

「（むぐつ、なんだここは！全然呼吸ができない！！）」

私が気が付くと、そこは真っ暗でまったく呼吸ができない場所だった。

私が少女の家に入り込み、まず最初に思ったことを言わせてもらおう。

「なに、私の食料が何も落ちてないだど!？」

私達一族は雑食。つまりなんでも食べる訳だが、人間の食べ残しの他にも人の髪や皮などなんでも食べるのだが、この家は清潔すぎたなにも落ちていなかったのだ!

さらに下はカーペットではなくフローリングのため埃どころかダニの死体すら落ちていない。

飲み水はトイレや風呂場に行けば良いのだが、食べ物が無いのはつらい。

私の外見は人間に不快感を与えるのは自分でも分かっている。だからあの少女の目の届かないところでこっそり見守っていかうと考えていたが、これは予想外の事態だ。

足が不自由で見たところひとり暮らしだった事から少しぐらい食料があると思ったのだが、まさかここまで私達一族が済みにくい家だったとは……………

「だが、この程度の障害で諦める私ではない。外に出ればアシダカに襲われるだろうからあの少女に気付かれないよう尾行し、髪の毛やら皮が落ちるたびに食せば良い」

うむ、私ながらいいい作戦だ。

これで私はお腹が膨れる。少女は掃除の手間が省ける。まさに一石二鳥という奴だ。

「よし、そうと決まれば移動しようか」

「きゃっ！またゴキブリや！！」

「なんと！」

見つかってしまっただど！？せっかく作戦を考えたというのにこれでは本末転倒ではないか！

・・・・・・・・・・・・・・・・まあいいか、見つかってしまったなら敵意が無い事を少女に伝えなければ。

「ちょっと待ってください。私は前日この家で息を引き取ったゴキブリです。

今日はあなたから受けた恩を返しにやってきたのです。」

「え？それ、ほんまなん？」

「ほんまです」

「え？でも、確かに死んどったみたいやし、庭にお墓まで作ったんやで？」

「私はあなたに受けた恩を返すために蘇ったのです。私は……
……あなたを幸せにする！！」

「え？え？全然状況が分からへん。それに私、君に恩なんか売ったけ？」

「む？あなたは死にかけの私を殺さないでくれただけでなく、お墓まで作ってくれたではありませんか。これ以上にどんな恩があるのでしょうか？」

「そうやったんか………ところで、私を幸せにしてくれるってどういう事なん？」

「……………」

ふむ、具体的にと言われたら困ってしまうな。
そういうところを全く考えていなかった。

はたして、どうやってこの少女を幸せにするか……………

むむむ、人生というものは意外な伏兵が潜んでいるものだな。

「ん、どうかしたん？」

ギクッ！

「い、いえ、なんでもありませんよ？別に具体的な内容を考えて無かったわけではないですよ？」

何も考えずに幸せにするって言ったわけではないですよ？」

ぐ、今無意識にいろいろ自白してしまった気がするぞ。

なんということだ…………… O R Z

「・・・・・・・・・・ぷぷっ、あははははははは」

「む、何がおかしいのですか！」

「はははは、いやだって最初はかっこ良い事言ってたのに急におどおどしだすから」

「くっ、一生の不覚だ・・・・・・・・・・だが、この程度で逃げ出す私ではない。
私は必ず、あなたに恩を返します。それまで一緒にいようと思うのですが、良いですか？」

一度転んでもすぐ起き上がって突撃する。それが私たちゴキブリ一族だ。

この程度のミス、なんともなる！

「ええっと・・・・・・・・・・それは無理かな」

「え、何ですか！？」

「だって私虫苦手やし、君がこの家で繁殖してもたらこの家はゴキブリ屋敷になってまうやろ？」

むぐぐ、そのぐらい我慢してくれてもいいのではないのか？
子孫を残すという事はすべての生き物にとって当たり前だということ
だろうに！！

だがしかし、今は繁殖やらなんやら言ってられないな。

私は一度恩を返すと決めたのだ。こんな事で引き下がれるわけがな
い！！

「そこを何とか！虫嫌いなら、なるべく見た目を良くするように心
がけます！
繁殖されることを嫌うならば、絶対に繁殖もしないと約束します！
だから、私をあなたと一緒に居させてほしい！！」

心の底から感情をこめて少女に語りかける。

もしこれで断られたら．．．．．もうどうしよう
もないが。

「うーん．．．．．繁殖は、しないんやな？」

「ああ、しないと約束しよう。私はゴキブリだが、約束は絶対に守

る」

「じゃあ、別にこの家に住ましてあげてもええかな」

「ほ、本当ですか！私は、あなたと一緒にいても良いという事ですか！？」

「うん、ええよ。これからよろしくな！………え
っと、名前は」

「ああ、名前ですか。私は所詮ゴキブリなので、人間のように名前はないんです」

「そうなんか………じゃあ今日から君はコー君や！」

「コ、コー君！？なんですかそのかわいい名前は！！」

「だってゴキブリって英語でコックローチやろ？
だからその最初の文字をとってコー君や。かわいいやろ？」

「か、可愛いですが………
まあ良いです。あなたがそれを望むなら」

「うん、じゃあ改めてよろしくなコー君」

「ええ、こちらこそ」

こうして、今日から私の少女への恩返し生活が幕を開けたのである。
続きは・・・・・・・・・・・・・・・・また今度だ。では、また合おう。

最速の3話 蘇りし最速の魂（後書き）

基本コー君ははやてに対して敬語で話します！
という訳でおなじみのこのコーナー！！

ゴキブリ図鑑く世界のゴキブリ達く

…クロゴキブリ…

日本でよく見られるゴキブリの一つ。

皆さんがゴキブリと言われてまず想像するのはだいたいコイツ。体長は約30mm程度。

一般家屋や屋外で最もよく見かけるゴキブリである。夏が終わる9月頃になると、寿命を終えようとしている成虫のクロゴキブリを早朝や夕方から夜間に路上でよく見かける事ができる。

成虫は名前の通り黒く光沢のある外見で、この見た目から”台所の黒い悪魔”と呼ぶ人も少なくない。（はず）

主な生息場所は屋外のゴミ置き場などで、ゴミ置き場近くのコンクリートの割れ目やマンションのゴミ置き場の中、民家の床下、公園等の樹木の隙間等、マンホールのフタの裏等、外の環境に多い。

前回紹介したチャバネゴキブリと違うのは、冬の寒さにも耐えられるという事である！

成虫まで要する期間は2年と言われ、本種を含む大型種は移動速度（動きが素早い）が早い。

どのくらい早いかというと、台所で見つけた後、人間に気が付かれないスピードで洗面所に移動し2匹いると錯覚させるほどである。

戸建て住宅に侵入してくる経路は、まず建物外周に置いてある植木鉢の下や、残材の下部・隙間に潜み、床下通気口や屋根と壁の隙間などの割れ目より床下や壁の中、天井裏に侵入する。天井裏や床下と室内が繋がっている場所は、配水管が貫通している水回り（台所

や浴室、洗面所）押入、畳の隙間などであり、食べ物臭を含んだ室内の空気が洩れる隙間より室内に侵入してくる。

ゴキブリ図鑑く世界のゴキブリ達くクロゴキブリ編 完

目指せ！脱、テンプラー！！

最速の4話 誕生日前夜（前書き）

若干時間かったのは学校があつたから。
そこところは許してくださいね。

目指せ！脱テンプレ！！

最速の4話 誕生日前夜

はやてと一緒に住み始めてから1週間弱、私はすっかり八神家に溶け込んでいた。

私の今できる仕事は家内の害虫駆除およびはやての手が届かないところの掃除。

およびはやての話し相手をするのである。

そうだ、最近でははやてから家族らしく接してほしいという御所望があったのだったな。

むう、仕事が多すぎて困ったものだ。

だが、周りから嫌われ、惨めに生きてきた頃より何倍も楽しい毎日を送れている。

ある時は家に入ってこようとする同族と交渉し立ち去ってもらい、ある時は冷蔵庫の裏や狭いところを掃除する。

はたまたある時ははやてと楽しく会話する。（私としてははやてとの会話が一番楽しいのだが）

私が今まで体験した武勇伝を話せばはやては笑ってくれ、悲しい思い出を離せば私に同情してくれる。

はやてに恩を返すつもりで生き返って来たのにこれでは恩を受けてばかりだ。

気が付けばまた一つ、また一つとはやてから受けている恩が増えてしまっていた。

「むう、このままではダメだな。

何か行動を起こさなければ……………」

とは言ったものの、何をすればいいのやら。

私はそんな事を考えながら玄関の前を行ったり来たりしていると、電話機に留守番電話によるメッセージが入っていることに気が付いた。

「ふむ、思いついた。小さい事を少しずつ積み重ねていけば良いのだ。

では早速この伝言をはやてに伝えるところ」

私は電話機の上までよじ登り、ボタンを押す……………押す？

「なんて事だ！スイッチが固すぎて押せないではないか！！」

だろうか。

むう、やはりゴキブリの姿ではできることも限られてくる。どうにかならないものか。

ああ、人間になりたいものだ。私が人間になれたならはやてをもっと楽にさせてあげられるというのに………シンボリ

「そ、そんなに気を落とすことないで。誰にでもできる事とできない事があるからな？」

コー君はコー君ができることをやってくれるだけで私は満足やからな？」

「そ、そうか？ならば良いのだが………むう。
ところで留守番電話にメッセージが入っているようだぞ？」

「え？誰からかな？」

はやてが留守電のボタンを押すと、録音メッセージが流れた。

”留守電メッセージ、一件です”

” 「もしもし？海鳴大学病院の（ry （この先は原作を見てね！
A's 編第一話参照）」

「おお、明日ははやての誕生日だったのか。なにかお祝いをしなければいけないな、なにか御所望はあるか？」

「いやいや、別にそんなに気を使ってくれんでええよ。コー君が一緒にお話してくれるだけで私は満足や」

「ぬ、良いのか？せっかくの誕生日だというのに」

「ええんや。それにコー君はゴキブリなんやから、私の為にできることなんて話し相手になるぐらいやろ？」

「むう、それを言われると返す言葉がない」

「ふふ、そういう事や。まあそういう事やし、今日はもう寝ようかな」

「うむ、早寝は良い事だな。私も明日の為に何か話のタネでも考えておくことにしよう。ではおやすみなさいだ、はやて」

「うん、おやすみな」

そういうとはやては自分の部屋に戻っていった。

「うむ、では私も寢床に戻るとするか」

この時私は、1時間後にあんなことになるだなんて思ってもみなかった。

今思えば、何故あんな事になってしまったのか……………

まあ、はやてには悪かったと思ってはいる。

悪気はなかったんだがな……………ぬ？
もう尺が無い？

では、この話は次話に持ち越すとするか。では、また会おう。

最速の4話 誕生日前夜（後書き）

ゴキブリ図鑑〜世界のゴキブリ達〜

…ワモンゴキブリ…

大きさは体長30〜45mmで、日本における屋内性ゴキブリの中で最も大型だ。体は褐色で光沢があり、前胸背板に黄白色の環状紋（輪紋）を有するのが特徴である。

ワモンゴキブリは熱帯、亜熱帯共に広く分布するゴキブリで、アフリカ原産といわれている。国内では南西諸島の優先害虫種で八重山諸島では屋外にも生息する。このほか九州各地、兵庫、大阪、和歌山、愛知、東京などの地下街やビルの下水槽などに生息している。

ワモンゴキブリは、暖房設備のあるビル、レストラン、地下街、病院などに住みつき、下水道のマンホールやゴミ処理場、水洗便所の腐敗槽などに生息する。

成虫の寿命は約半年〜2年で、平均14個の卵が入った卵鞘を4〜10日間隔で、50回以上も産む。ちなみに成虫になるまでは約半年〜1年ぐらいでクロゴキブリも早い。早くてでかいとは………
恐ろしい。

さらにこいつは食中毒菌をはじめ各種の病原微生物を体表面や脚、排泄物などを通じて伝播するため、食品に迷入して混入事故となった場合は最悪である。

ゴキブリ図鑑〜世界のゴキブリ達〜ワモンゴキブリ編 完

目指せ！脱テンプレ！！

最速の5話前半 予想外のハプニング（前書き）

文字数が多くなってしまったのと、時間がかかりそうなので前半後半に分けてみました。なので戦闘シーンは次回にもちこしです！
ワザとじゃないんですよ？これは仕方がなかったからやったんです。
だからね、分かるでしょ？

最速の5話前半 予想外のハプニング

あれから一時間がたった。

今私は明日はやてに話す武勇伝のタネを仕込んでいるところだ。

「ふふっ、この話をすればはやては笑ってくれるだろうか」

どのような思い出話をすればはやてによるこんでもらえるのか。
そう考えていた私はふと時計を見る。

「ふむ、もう12時か。そろそろ寝る時間帯だな」

そう思い、私が寝ようとした瞬間、はやての部屋から禍々しい光が見えた。

それははやてがなにか悪戯をしているとか、私に隠れて夜更かししているとかそんなものではなく、何か危険な気配を感じる。

「これは一体何事だ！」

嫌な予感がした私ははやての部屋のドアを開け・・・・・・・・・・
・
することはできないのでドアの隙間から部屋に入る。

すると、にわかには信じられない光景が私の目に飛び込んできた。

「あ、コー君！なんやのこれ！！」

「分からない。こちらが聞きたいぐらいだ！」

前日まではやての机に飾られていた本がまるで生き物のように脈動しながらはやてに近づいていく。

「はやて！今そちらに行く。なるべく下がれ！！」

私はそういうと羽を広げて飛び上がり、はやての近くまで行き着地する。

「こ、コー君・・・・・・・・・・」

はやては恐怖に顔をひきつらせ、私を頼るような目で私を見る。

「大丈夫だはやて。私が付いている」

そして本の鎖が壊れ、本のページが次々とめくられていく。

「封印を解除します」

開いていた本が閉じ、今度ははやての目の高さまで降りてくる。・・・

「起動」

その瞬間、変な本が急に輝き出し、眩しさのあまり目を瞑ってしま
う。

そして、次に目を開くと四人の人影がそこにあった。

「闇の書の起動確認しました」

常人ではありえないピンク色の髪をした女性が口を開いた。

闇の書だど？ なにか危ない予感がするな。
はやてをこいつらから離れさせなければ！

「はやて！こいつらから離れるんだ！！」

私はこう言っただとたん、自分の失態に気が付く。

大声出したら駄面じゃないかと。

「なに、貴様何者だ！」

最初に反応したのはピンク色の髪の女性。

そして、言葉を発すると同時に、その手に剣らしき物が急に出現する。

他の奴らも同時に気が付いたようで、それぞれ何かを言っていたが同時に行っていたので何を言ってるのか分からなかった。

「くっ、はやて！私が時間を稼ぐ。早く逃げろ！」

私は羽を広げてピンク色の髪の女性に飛び掛かった。

「虫如きが私に襲いかかろうなどと・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女はそう言い、私に斬撃を放つ。

「くっ、危ない」

私は間一髪にそれを．．．．．いや、間一触覚で
その斬撃をかわす。
だがしかし、

「くそっ、バランスが！！」

基本数多くの虫は飛ぶ時には足を広げ、バランスを取りながら飛ぶ
ものだ。

この動きは緻密なものであり、方向を調節したりするためには必要
不可欠のものだったのだが、先ほどの斬撃をかわそうとした拍子に
そのバランスを大きく崩してしまったのだ。

そして、バランスを崩した私はどこに向かっているのかというと．
．．．．．

「わわっ、コー君が私の方に飛んでくるーーーー！！」

「はやて！避けてくれ！！」

「ちょッ！足動かへんのに無理や！」

そう、はやてのいる方向だ。（高度はちょうどはやての顔辺り）

「きゃーーーーッ！！来んといてーーーー！！」

「すまんはやて！それはできそうにないーーーー！！」

想像してみてください、羽をひろげ、普段より大きく見えるゴキブリが
すごいはやさで自分の顔に迫ってくる様子を・・・・・・・・

私も一度、人間に対して意図的にこれを行ったことがあるのだが、
その時相手は泡を吹いて気絶してしまったのをよく覚えている。

まあ、そのぐらいの恐怖を今はやては味わっているわけなのだが・・

はやて、すまない。

「嫌やーーーーーーーーむぐう！！」

これは偶然か必然か、私ははやての口の中に入ってしまった。

さらにそこで勢いは止まらず。

「ゴクン・・・・・・・・あ」

「ぬわー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー」

私は意識をそこで・
・
・

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12
13	14	15
16	17	18
19	20	21
22	23	24
25	26	27
28	29	30
31	32	33
34	35	36
37	38	39
40	41	42
43	44	45
46	47	48
49	50	51
52	53	54
55	56	57
58	59	60
61	62	63
64	65	66
67	68	69
70	71	72
73	74	75
76	77	78
79	80	81
82	83	84
85	86	87
88	89	90
91	92	93
94	95	96
97	98	99
100	101	102

はやて side

なんやなんや！一体何が起こってんのや！？

本が急に光りだしたかと思ったら中から人が出てきたで！

「闇の書の起動確認しました」

私が突然のことで呆気にとられていると、本から出てきたピンク色の髪をした女性が口を開いた。

すると、急にコー君が私に「こいつらから離れろ」と言った。

離れろ言うたって、私足動かへんのにどうやって離れろ言うねん！

って、急にコー君がピンク色の髪をした女性に飛び掛かったで！
・・・・・・・・・・・・・・・・勝てるんかいな。

とか言ってる間に切られた————！！

弱ッ！コー君弱ッ！！

って、こっちに飛んで来とる————！！

「はやて！避けてくれ！！」

「ちょッ！足動かへんのに無理や！」

この状況は非常にやばい！

肩や背中、胸の辺りならまだ気持ち悪いぐらいですむんやけど、今
コー君が飛んでる高さはちょうど私の顔の位置あたりだからまずい。

このままコー君が私の方に飛んできたら・・・
・・・あわわわわわわ

「きゃーーーーッ！！来んといてーーーー！！」

「すまんはやて！それはできそうにないーーーー！！」

こうしている間にコー君はすでに目と鼻の先まで来ていた。

「嫌やーーーーーーーーむぐう！！」

私はこの瞬間、叫ばずに口を閉じておくべきだったと激しく後悔し

た。

なんで後悔したかというと．．．．．コー君
(ゴキブリ)が私の口の中に入ってしまったからや。

さらにそこで私の不幸は収まることを知らず．．．．．

「ゴクン．．．．．あ」

「ぬわーーーーー」

コー君 (ゴキブリ)を飲み込んでしまった。

「あ、あれ？なんか急に意識が．．．．．」

「

コー君を飲み込んだと同時に、原因不明の眩暈が私を襲い、私はそこで意識を失ってしまった。

最速の5話前半 予想外のハプニング（後書き）

ゴキブリ図鑑〜世界のゴキブリ達〜

…コワモンゴキブリ…

大きさは30〜35？とワモンゴキブリよりやや小さく、濃い茶褐色。前胸背に淡黄色の斑紋があります。

前胸背板に現れる黄褐色の紋は、ワモンゴキブリよりも鮮明に現れており、前翅に黄色のラインが入ります。

コワモンゴキブリは私たちの生活範囲内では生息場所はそれほど多くないので、見かけることはあまり無いと思われます。

ちなみに、主な生息場所はビル内の地下マンホール内や、暗渠、下水など一年を通して温度・湿度が高い場所に多く、屋外にはあまり生息していません。沖縄や小笠原などは屋外に普通に生息しており、夜間路上や民家の室内に出没する事もあります。

ゴキブリ図鑑〜世界のゴキブリ達〜ワモンゴキブリ編 完

最速の5話中半 力の目覚め（前書き）

今回は前書きにゴキブリ図鑑を設けようと思います。

ゴキブリ図鑑く世界のゴキブリ達く

…トビイロゴキブリ…

隊長は30—38m。

このゴキブリは全体の色調がワモンゴキブリに似ていますが、ワモンゴキブリと比べやや小さく、体形がずんぐりしています。

さらにワモンゴキブリによく似た形態をしており、見分け方として前胸背板の紋の違いが言われますが、両種とも特徴があまり出ていないものは判別が難しい。

前胸背板に輪郭の黄褐色紋があり、この色がとび色をしています。

主に生息している場所はワモンゴキブリと同様でビル内の地下マンホール内や、暗渠、下水など一年を通して温度・湿度が高い場所に多く、屋外にはあまり生息していないと言われています。

ゴキブリ図鑑く世界のゴキブリ達くトビイロゴキブリ編 完

最速の5話中半 力の目覚め

私ははやてに飲み込まれてしまい、

そこで意識私の意識は・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

途切れなかった。

どういう事か先ほどまでより視界ははっきりしており、目線も普段より高くなった気がする。

「怪我はありませんか主！」

先ほどのピンク髪の女性が先ほどとは打って変わって心配そうに声をかけてくる。

さっきは剣で私を切った癖に怪我はないかだと、頭でもうったか？

「ところで、さっきのゴキブリは一体なんだったのでしょうか」

む、私の事か？

「そんな事よりもゴキブリを飲んでしまった主の容体が心配だ。シヤマル、一応見ておいてくれ」

「そうね．．．．ザフィーラの言うとおりで一度見ておきましょうか」

そういうと、金髪の女性が近寄ってきた。

「ええい、寄るな！先ほどは私を切ったというのに今度は治療だとい！？」

貴様らの目的はなんだ！」

私は手で振り払い、距離をとる。

「私は飛び掛かってきたゴキブリを切ろうとしたただけであって主を切ろうとしたわけじゃ……………」

「そのゴキブリが私だと言うのだ！」

一同「「えっ！？」」「」

「ぬ？なんだ、何をそんなに驚いているのだ？

見た目からして分かるだろう？ほら、どこからどう見てもゴキブリだろうが」

「えと……………どういう事でしょうか？」

「分らん。ヴィータ、何か分かるか？」

「えと……………シグナムが切ったのがゴキブリで、そこに立ってる主もゴキブリって事か？」

「先ほど主がゴキブリを飲み込んでしまったことに何か原因があるんじゃないか？」

しばしの沈黙。

「む、なんだ？何か変な事でも言ったか？」

「鏡見てみるよ」

「む、どういうことだ？」

なぜ私が鏡など見なければいけないのか。

基本われわれゴキブリの一族は皆きれい好きなのだ。

だから常に体は掃除している。故に顔になにかがついていたりするはずもない。

そう思いつつも、ピンク（r y）が運んできた鏡をのぞきこむ。

「む？私が映っていないぞ」

私は一切映らず、鏡の中にははやてしか映っていない。

「ま、まさか・・・・・・・・・・いや、そんなはずは」

少し気になった事があったので私は右手を挙げてみた

すると鏡の中のはやてが右手を挙げる。

次は左手を挙げてみた。

すると、まるで鏡でも見ているかのようにはやても同じタイミングで左手を挙げる。

・・・・・・・・・・ああ、私が置かれている現状を今理解した。

「な、何だこれは――――！！！」

私は急いで顔や体を触って自分の体がどんな状態化を確認する．．．

ああ、紛う方無くはやての体だ。

このことに気が付いた途端頭痛がし、頭の中に私に関するすべての情報が流れ込む。

「ぐっ．．．．．頭痛が」

ああ、なるほど。すべてを理解した！

この力さえあればはやてを守ることができるぞ！！

「大丈夫ですか！」

「よ、寄るな！さっきから言ってるだろ。私はお前らのマスターでは無い！」

「しかし、闇の書のデータベース上あなたが主という事になります」

まだ、そんな事を言うか。

「理解力の無い奴らだ。私ははやてでもお前らの主でもない」

「私はコックローチ・・・・・・・・・・・・・・・・最速のコック
ローチだ!!」

そう言い放ち、私は自分の力を初めて使った。

最速の5話中半 力の目覚め（後書き）

今回回避したテンプレ。

・後書きでよく作者とキャラクターが会話するやつ。

今回それをやろうと思ったけど気が付いたらテンプレだったのでと
りあえずやめておきました。

皆さんが許可をくれたらやろうかと思っています。

最速の5話後半の前半 闇討ち（前書き）

更新遅れてすみません。

本当は戦闘シーン最後まで書いてから投稿する予定だったんですが、これ以上遅れるといけない気がしたのでいったん投稿。

次に後半を更新して、少ししたら1つにまとめるつもりなので許してくださいね。

最速の5話後半の前半 闇討ち

「私はコックローチ．．．．．最速のコックローチだ！！」

するとはやての服の隙間から無数のチャバネゴキブリが飛び出し、私の周りで螺旋を描くように飛び回る。

「はああああああ．．．．．
．．

あるゴキブリは体内に侵入し、身体能力を増加させる。

「あああああああ．．．．．
．．

あるゴキブリは羽となり私に飛翔力を与え、

あるゴキブリは触覚となり私に全ての情報を伝える。

「あああああああ．．．．．
．．．はあっ！！」

そして100は超えるであろうゴキブリの大軍がはやての体全体を覆い、
強固な鎧へと姿を変えた。

「さ、最速のコックローチだと！？」

「つていうか、主がゴキブリになっちまった！！」

ふむ、なかなかいい感じだ。
すごくよく馴染む。

私は体のいろいろな所を動かし、体の精度を確かめる。

精度は上々、はやての麻痺している足もゴキブリ達が行った体内からの強化によって他の部位に後れを取らないほどに動かせる。

しかし、これは本当にすごい……体中から力があふれてくるようだ。

はやてとの相性もいいらしく、拒絶反応らしきものも一切出ない。

これならあれも使えるやもしれんな。

「くそっ、一体何が起きているんだ……
ヴィータ、シャル、ザフィーラ！！主をあのゴキブリから救出するぞ！」

一同「おう！」

「む、仕掛けて来たか（ふむ、この狭い部屋で多対一は少々辛いかならば……）」

一旦部屋から出て闇討ちの一択！

「奴らの視界を塞げ！召喚、チャバネゴキブリ！！」

私の目の前にいくつもの空間の湾曲が発生し、無数のチャバネゴキ

ブリがその中から飛び出す。

「うわっ！なんだこいつ等！！
前が全然見えねえ」

「落ち着けヴィータ。高がゴキブリだ、切れば落ちる」

「紫電一閃！」

ピンク色の髪をした女性はなにやらカッコいい技名らしきものを叫び、

炎をまとった刀でチャバネゴキブリの群れに一閃をはなつ――
――が、

チャバネゴキブリの群れはその斬撃を見事な連携で回避した。

何匹かは炎によって焼けてしまったがチャバネゴキブリのカーテンはまだまだ健在。

私はその隙にはやての部屋からでる。

「さて、チャバネゴキブリ達が頑張ってくれてる間に私もいろいろと準備しますかね」

私はそう言い、まず手始めに家のブレーカーを叩き潰した。

[illegible]

数分後、私は大体の準備を終えた。

チャバネゴキブリ達の妨害もそろそろ限界だろうから、タイミング的にはちょうどいい。

おっと、噂をすればはやての部屋から足音が聞こえてきた。早く隠

れなくては……………

「くそっ、ゴキブリの相手をしている間に奴を見失ってしまった!」

「それに何かに妨害されて魔力探知できないし……………」
「……周りが暗すぎるから目で探すのも難しいわ」

「おいおいどーすんだよ! 主の体はあのゴキブリの中に取り込まれてるんだぜ!？」

「シャル、この家の周りに結界は張ったのだったな」

「ええ……………だからこの家の中に必ずいると思うんだけど……………」

「ならば手分けして探すぞ。急げ!」

隠れているため誰が何を言ってるかはよく把握できないが、どうやら私の狙い通りに拡散してくれたみたいだ。

さてさて、どの順番で始末していこうか。

[illegible]

「くそ、あのゴキブリ野郎どこ行きやがった」

まず一番目の獲物は見た目からして弱そうな子供を狙う事にした。

見たところ得物は鈍器と言ったところで、口調からして冷静な判断をせずに突っ込んでいくタイプだろう。

闇討ちはこういう相手が一番やりやすい。

私は天井や壁を這い、無音かつすばやく得物に近づく。

「つていうか真っ暗で何も見えねえし！、くそっ、あの野郎見つけたら絶対にただじゃおかねェ！」

「誰がタダじゃおかないって？」

「なっ！！」

得物は後ろから急に話かけられた事に驚いたようで、ビクツとした
と思うと急いで後ろを振り向いた――――
が、すでにそこには誰もいない。

こいつらはゴキブリの本当のスピードを知らないだろう。

今私が身にまわっているチャバネゴキブリは1, 2 m内外の大きさ
にも関わらず、自分よりはるかに大きい生き物から逃げ切るだけの
足と羽をもっている。

それがその身体能力をすべて保ったまま、人間の大きさになったら
どうなるだろうか？

答え、人間から見ではるかに大きい生き物からも逃げ切るだけの速さを得ることができる。

チャバネでこのスピードか．．．．．今はまだできないが、クロゴキブリを操作できるようになったら一体どれほどのスピードを得ることができるのだろうか。

ふはははは！考えただけで心が躍る！！

では、さっそくこのガキには退場してもらおうか。

ガキはいまだに私がいたところを見つめている．．．．．
．．．まあ、振り返ってからまだ1秒とて立っていないのだから振り返った状態にいる事はなにも不思議な事ではないのだが。

私は身を翻しながら飛翔し、天井に張り付き、そこからガキの後ろに飛び降りる。

無論、物音は一切立てない。

そこからガキの首に腕をまわし、一気に締め上げる。

「ん！………んー！！んー！！」

ガキは必死に私の腕から逃れようとするが、ゴキブリ達に強化されている私の腕力に勝てるはずもなく、ただ必死にばたつくだけで、その行為は何の意味もなさなかった。

にしても、このバタつかれるのは本当にうっとおしい。

私は黙ったまま首を絞めている腕にさらに力を込める。

グキッ

「んんッ！………」

すると、先ほどまでバタついていたガキは糸が切れた操り人形のごとく動かなくなり、手足は力なく垂れている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・少し力を入れ過ぎたか？まあ、死んではないだろ」

私は気絶したと思われるガキを冷蔵庫の中に隠し、次のターゲットを決める。

「次はサポート役及び回復役をかたずけるか・・・・・・・・・・ふむ、言動・容姿・第一印象から推測するに、あの金髪の女性がサポート役でまず間違いないだろう」

闇討ちはスピードも命だ。

もしあのガキの姿が見当たらない事に誰か気が付いたらその時点で

警戒され、闇討ちは不可能に近くなる。

私は触覚を使い、この家じゅうの音や空気の振動、微妙な温度の違いを探知する。

「む、風呂場付近に一人、二階に一人、出入口近くに一人気配があるな」

私はさらに誰が誰かを見極めるため、触覚を澄ませる。

足音や温度からして二階にいるのは男。はずれだな。

歩くごとにする床の軋む音、呼吸のリズムから割り出すに……
……玄関付近の女性は良く鍛えられていると推測する。という事はサポート役ではないな。はずれだ。

となると、あとは風呂場付近の女性一人という事になる。早速かたずけに向かうか。

[illegible]

「うーん。ここにいないみたいね。」

こちらコー君、風呂場付近に到着した。

目標を視認。これより駆除を開始する。

今度は壁に張り付かず、一気に近づき気絶するまで痛めつける作戦で行かせていただく。

バツ！

私は廊下を蹴り、壁に向かって飛翔。

そこから走るように壁を蹴り、相手の死角を見極め一気に接近する。

「（ここまで接近しても私に気が付かぬとは……………
・ 本当にこいつらは恐れるに足りんな）

まあ、こいつは戦闘向きではないから仕方がないか。と落胆しつつ
私は当身……………は苦手なので腹を全力で殴らせても
らう事にした。

「げふうっ！」

不意に強烈な一撃を腹にくらった金髪の女性は下品な叫び声と共に吐瀉物を吐き出す。

おお、汚い汚い。こんな汚い女性は閉まっちゃおうねー。

ドサッ

私は気絶した女性を風呂場に投げ入れる。

にしても……………計画通りとは言え、なんの考えもなしに手分けして戦力を拡散させるとは……………

私もつくづくなめられたものだな。

良いだろう．．．．．ならば貴様らが侮ったたかが虫
けらが貴様らに完全なる敗北をプレゼントしてやろうじゃないか！！

この最速の私が誰にも追いつけぬスピードで瞬く間に貴様を殲滅し
てやろう！

次は犬耳の男だ。気を引き締めて行かんとな．．．．．

最速の5話後半の前半 闇討ち（後書き）

ゴキブリ図鑑。お休みです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1855w/>

魔法少女リリカルなのは～最速のコックローチ～

2011年11月16日03時02分発行